

日常の違和感やモヤモヤを押し殺さず、問い続けよう 支援を続けたい人へのアセスメントとAOPの実践

2026年6月に埼玉県川口市で起きたケアマネジャー殺害事件は、医療・介護・福祉の現場に言葉にならないくらいの衝撃を与えた。事件の真相は不明だが、いま私たちがしなければならないのは、同じ不幸を繰り返さないために思考し続けること。福祉社会学・ソーシャルワーク研究に独自の視点で切り込む兵庫県立大学の竹端寛教授に、ハラスメントが起り得る背景構造を紐解いていただく。まず、自分自身を見つめ直してみよう。

「あかんもんはあかん」

学習過程のないコミュニケーションがハラスメントに

「人を殺したら、あかん」

この当たり前の事が、本項を貫く大前提です。その上で、なぜこのような「あかん」事態が起きうるのか、それに対してどう対処したらよいのか、をハラスメントとアセスメント、AOPという3つの視点で考えてみたいと思います。

まず、ハラスメントについては、安富歩さんと本條晴一郎さんが20年前に書いた名著『ハラスメントは連鎖する：「しつけ」「教育」という呪縛』（光文社新書）の定義を振り返る必要があります。同書によれば、ハラスメントとはコミュニケーションの不調や断絶のことを指します。

通常のコミュニケーションであれば、AさんがBさんにメッセージを伝えた際、Bさんはその内容を自分なりに解釈して、「こんな風に返したらいいのでは？」と相手とのつながりのあり方の認識をバージョンアップして、Bさんに返します。Aさんも同様にすることで、会話が成り立つのです。この際、相手とのつながりのあり方の認識をバージョンアップすることを、同書は「学習」と名付けています。



執筆 ▶

竹端 寛

兵庫県立大学環境人間学部 教授

ハラスメントとは、この学習過程を一方が作動させないことです。Aさんが学習過程を発動させていてもBさんがそれをしない場合、相手の言葉から学ぼうとしないので、一方的な価値観をBさんはAさんに押しつけることになります。いくらAさんが、「それは違います」「誤解です」などと反論し、Bさんが理解出来るように発言内容を変えたとしても、Bさんが学習回路を放棄して一方的な価値観を押しつけ続け続けたら、どうでしょう。ケアマネが「それは誤解です」といくら主張しても、「金銭をだまし取られた」と一方的に疑って相手を殺すことは、究極のハラスメントです。それは絶対に、あかん。

その上で、支援者がハラスメントに向き合う際の、構造的課題をもう少し引いて（メタ的に）考えてみたいと思います。

切実な思いや不安を汲み取る

赤ちゃんの時からハラスメントをする人はいません。ハラスメントは成長過程での傷つきや失敗の中で、トラウマ的に取り入れられるものです。精神科医の高木俊介さんは以下のように語っています。

「コミュニケーションの不得手を抱えて生きてきた精神障害者は、これまでも彼らなりに生きていこうとして様々な手段で自分たちの苦しみを訴えてきた。精神症状といわれる幻覚や妄想も、往々にしてその一つである。幻覚や幻想の背景に、これまで人生で受けてきた心の傷があるということを実践的に主張してきたのは、今話題になっているオープンダイアログである。また、切羽詰まった状況で